

逍遙点描

—絵と文・中嶋嶺雄—



徳本峠にて

私はこの四月から勤務校の山岳部長を仰せつかったが、私の大学時代の山岳部長は、山の哲学者としても知られる申田孫一先生だった。その申田先生から、遂に山登りを断念された旨のご自作の絵葉書をいただいたのは、もう数年も前のことである。最近、登山などという苦勞の多い、カッコウのよくない営為は若者に敬遠されているらしく、50代以上の高齢者ばかりが目立つがあれほど山を愛された申田先生が山登りを諦めたお気持ちもよく理解できる。

私が10年程前から再び山登りを始めたきっかけは、子供たちを連れてかねてより懸案であった徳本峠を越えてからである。

島々谷から入って岩魚止小屋と徳本峠小屋にそれぞれ一泊し、三日もかけて上高地へ下るといふそぞろな山歩きであったが、さすがこのルートは人にも殆ど会わず、二つの山小屋は一昔前のような家族的雰囲気満喫させてくれた。

正月に北アの蝶を形どった手描きの美しい年賀状を届けてくれた岩魚止小屋は、今もランプと薪の生活である。この小屋がよほど気に入ったのか、そのとき同行した長男は、アメリカ留学から戻って大学生になった年に、フルート一本をぶらさげて出かけてゆき、一夏を岩魚止小屋のボッカとして働いてきた。

日本アルプスの命名者ウエトンがかつて感嘆したように、徳本峠からの明神岳や穂高連峰の威容は、まさに圧巻である。霧の晴れ間に急いで筆を走らせたのが、あのときのこのスケッチである。

(東京外国語大学教授)

ASIA MONTHLY

東亞

1989

9

No. 267

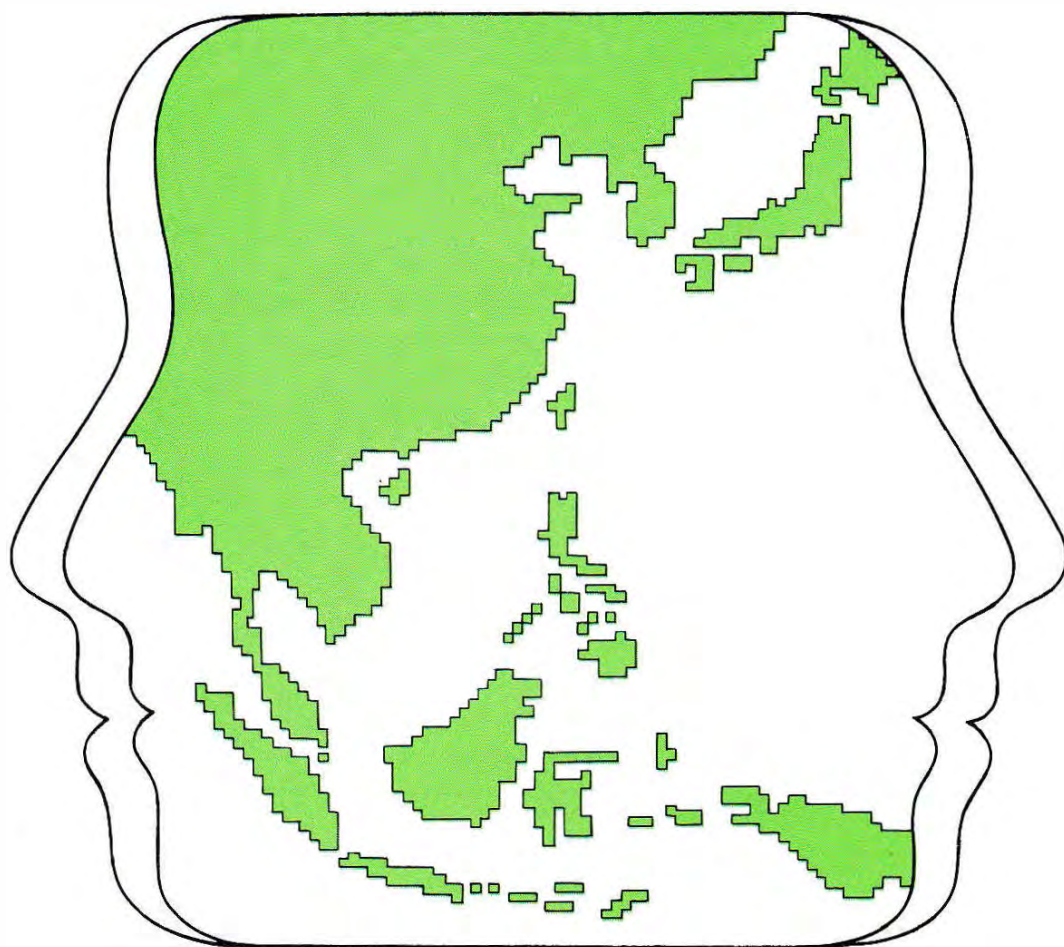
〔中国近代化への道〕

中国「改革・開放」十年の功罪を問う 魏 崑 崙

中国の外交交渉におけるシンボル操作 小 倉 和 夫

〔講演記録〕

混乱期の中の中台関係 武 見 敬 三



KAZANKAI